

Title	郷土誌論, 柳田國男編
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.142(620)- 143(621)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0142">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0142</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

な記述を試みた趣旨もこゝに存する」と云つてなる如く第二章、第三章に最も力を注がれたやうに思はれる。著者の専門にして得意の舞臺なるその第三章に於て特に著しい見解に接しないうらみを感じるのには遺憾である。これは紙數に限りあり且餘りに専門的に亘るため避けたのであらう。他日此方面に關し更に造詣の一端を公けにせられんことを望む。

著者は本年六月三日の東京朝日新聞紙上に於て「日本文化史の稿を終へて」といふ題目の下に今回公にした日本文化史古代篇は、わづかに従來學界に發表された諸家の研究の結果を按排して、やゝこれを組織立て聊か私見を加へたものにすぎない」と謙遜してをらるるが實際同紙上に於て著者が次の如く言つてゐるのも無理はない、「今や古代史の専門的研究は全く部分部分の細密な點に向つて深く深くと進んでゐるのであるから、その各専門家の議論の岐れる點を正當に理會するとすら一般の人々にとり、容易でなくなつてゐる」と。此の際あくまで眞摯な態度を以て本書を公にせられた著者に對し吾人は感謝すると同時に時宜に適當する好著として推奨するを辭せないのである。(宮島貞亮)

### 郷土誌論

(柳田國男編)  
郷土研究社發行

數年前雜誌『郷土研究』を發刊して郷土に關するあらゆる方面の研究を發表し鼓吹された著者は、雜誌休刊後もつばら爐邊叢書の刊行によつてその事業を繼續された。郷土誌論はその爐邊叢書

の一冊として最近公にされたものである。收むるところのものすべて八篇、即ち郷土誌編纂者の用意、郷土の年代記と英雄、村の年齢を知ること、村の成長、相州内郷村の話、村を觀んとする人の爲に、村の種類、農に關する土俗であつて、いづれも興味ある。そして卓拔な著者の意見をうかがうことができる。

『郷土誌編纂者の用意』において、従來數多く現はれた郷土誌を編纂者の志によつて上下幾段の差等ありとなし、その序文によつて四種に分類してゐる。即ち理想の卑いものから列擧すると、第一種は序文に「弘く我郷の形勢を天下に紹介し」などとあるもの、第二種は先輩によつて「愛郷の精神を養ふは則ち愛國心を盛ならしむる所以」などと讃められてゐるもの、第三種は「予煙霞の癖あり公務の暇云々」などと序してゐるもの、第四種は凡てを明瞭にしやうとする新しい計畫でなれるもので、著者の望を囑するのにはこの第四種である。この分類をみただけで、郷土誌に對する著者の理想のいかなるものかをほゞ看取することができる。而して立派な且つ役に立つ郷土誌を著はす用意として、一、年代の數字に大なる苦勞をせよ、二、固有名詞の詮議に重きを置かぬこと、三、材料採擇の主たる方面を違へること、四、比較研究に最も大なる力を用ゐること、約言すれば史學研究法から超脱し、氣六つかしい史學者の奴となつてはならぬことを注意してゐる。一體國家にしる、郷土にしる、乃至家にしる、それが歴史と關係する場合、年代の古きを尊び、それを非常に自慢したがるので、郷土誌編纂の場合その郷土の年代記の詮議に無用な努力をそそぐのであるが、これに對して著者は、「村は百年ばかりの新田でも、其

時南蠻から飛んで来た百姓でもありません、やはり其近郷近國に、古くより神洲の土を耕して居た人です。……海外殖民を雄圖と目する今日に、村が新しいとて卑下すべき理屈はどこにありまじやう。……」痛烈な皮肉の抗議を浴びせてゐるのは愉快である。

『村を觀んとする人の爲めに』においては、相州内郷村を觀察したる經驗にもとづいた村落觀察の注意であつて、問題の中心、調査者の資格、所謂郷土資料、前代郷土誌の價値、古證文古帳面、繪圖の効用、地名は重要な口碑、準備地圖、其地圖の利用、字と開墾者の生活、宅地移動、地境と領分境と、飛地の歴史上の意味、地下の資料、無ければならぬ工作物の址、僅に残れる前代の土工、天然記念物の意味等の諸項に分つて、こまかい、親切な、そして當を得たる警告を與へられてゐるのは、村の觀察者にとり實に尊い指針であつて、それは學識經驗ともに豊富な著者のことき人によつてのみ與ふることのできるものである。

更に『村の種類において』、村の形貌を相するに當つて、個人の方では變更することの難しかつた土着當時の條件に重きを置いて、必ずしも年代にも地理にも依らずに分類し、第一に新田百姓の村、第二に草分百姓(隠田百姓)の村、第三に根小屋百姓の村、第四に門前百姓の村、第五に名田百姓の村、第六に斑田百姓の村となしてゐることきも特色あるものである。また『農に關する土俗』において、簡單ではあるが田植の儀式について暗示された問題のごとき民俗研究にとつて興味津津たるものである。

わづか百四十四頁の小冊子ではあるが、該博なる智識と巧妙な

る叙述とは、郷土研究及び郷土誌編纂に關して多大の注意と奨励とを與へ、つきざる興味をそそるのである。ことに農村問題のやかましき現今において地方行政經濟に意を用ゐる人は、本書によつて研究の根本態度を教へられねばならぬ。村に生れ村に育つたものは、本書によつて村に對する愛着の念をさらに強むるであらう。

(松本芳夫)

## 古琉球の政治

伊波普猷著  
郷土研究社發行

著者は明治廿九年東大言語學科出身の文學士、既に「古琉球」「沖繩女性史」等の著書を以て知られておる。本篇は、沖繩基督教青年會で講演した「古琉球の政教一致を論じて經世家の宗教に對する態度に及ぶ」といふ講演筆記の増補改題したもので、簡明に琉球の神教政治の梗概を述べておる。

琉球民族は日本民族の一支族であるが、或時代にかの群島に移住し、爾來日本本國と交通阻隔され加ふるに活動舞臺の狭少なりしたため、文化の發達は極めて緩慢であつた。西曆十四世紀の初頭沖繩本島の民族はほと三つの團體に分れてゐた。之を尙巴志武力によつて統一し、ついで尙家の尙眞王に至つて制度文物を完成し中央集權の實を擧げたのである、王は即ち尙家の氏神を民族共同の神として崇拜せしめ、未婚王女をその齊の君となし、之を聞得大君と名づけ、首里に永住せしめたる按司即ち大名たちに對して